

押川方義先生を憶ふ

一

高きを仰ぐこゝろ、優れたるものを慕ふこゝろ、此心は人間の胸に潜む最も高貴なる感情である。この感情ありてこそ、人類は不断に向上登高の路を踏んで今日に及んだ。それ故に吾等はカーライルと共に『社会は唯だ自己よりも偉大なる者を尊敬する心の上のみ栄える』ことを信じ、またエマソンと共に『小哲学者たらんよりはプラトン研究者、小詩人たらんよりはシェクスピア研究者』たることを以て、一層生甲斐あることを信ずる。今の世に時めくデモクラシーの思潮は、一切のものを同一水平面に立たしめずば止まない。そは低きものを高めると同時に、高きものをも低める。その目指すところは総てを平凡化するに在るが故に、聖者の存在を否定し、英雄の出現を拒否し、天才と精神病者とを混一して、万人を悉く『凡夫』たらしめんと努めてゐる。

吾等はデモクラシーの思潮が、低きものを高めんとし、且つ事実には於て之を高めたる点に就て、重大なる歴史的意義と価値とを認める。この水平運動は、今後も続行されるであらうし、また続行するが宜しい。さり乍ら此の運動に於て最も戒心すべき点は、実に人類の魂より莊嚴なる理想を奪ひ、崇高なるべき人生を俗悪化し去ることに在る。さればこそカーライルは、其の鋭き予言者的洞察によつて、デモクラシーの五臟六腑に潜む病根を看破し、痛烈なる警告を与へて居る——『現代は、その基礎に社会の依つて立つ標準を有せざる群衆の下宿屋である。彼等は各自孤立して其の隣人を念頭に置かぬ。彼等は互に抗争対峙して、自ら取り得るものを掴み取り、これ吾物なりと叫びつゝ、而

も此の状態を平和と呼ぶ。何となれば彼等は盜賊をせず、盜賊よりも狡猾なる仕事をするが故に、表面の平和が保たれて居るからである。現代に於て民衆の指導者と稱する者は、其実決して諸君を指導し得るものでない。彼等は唯だ諸君の在るが儘に在れと叫び得るものである』。

在るが儘に在れ——これ現代指導者の唯一の号令である。何となれば彼等に高貴なる理想なきが故である。人間の衷なる尊貴なるものに眼を閉ぢ、万人を動物的水準に並立せしめんとするが故である。然るに現代は歐米と言はず日本と言はず、苦惱と不安とに充満して居る。その苦惱と不安とが深刻痛切を加へるにつれ、改造革新の要求が日毎に強烈になつて行く。此の改革を吾等は何者に期待すべきか。唯だ『多数』を頼みとする民衆政治家に期待し得るか。断じて否である。彼等の号令は『在るが儘に在れ』と云ふに過ぎざるが故に、換言すれば民衆に阿り民意に引摺られ行くものに過ぎざるが故に、彼等の努力によつて現在よりも『異なれる』時代が招徠されるとしても、決して『より高き』又は『より善き』社会が実現せらるべくもない。それ故に吾等はイブセンと共に断言する——『デモクラシーによりて氣儘に右往左往する盲目なる群衆から、真個の社会改革が実現されるだらうと予期することは固より出来ない。今や古き社会は病んで將に死なんとする。此時に當つて将来に対する唯一の希望は、ただ個人の人格に在る。偉大なる男子、偉大なる女子の出現によつてのみ、社会の革新は可能である』。

二

まことにイブセンの言の如く、人類の向上登高、社会の改造革新は、唯だ偉大なる人格によつてのみ促進され指導されて来た。現代人の多くは、世界の運命は一人又は数人の手によつて左右されるものでなく。人間は如何なる場合に於ても、人類全躰のための大なる仕事場に働く平等なる職工に過ぎぬと考へ、または考へさせられて居る。さり乍

ら古今東西の歴史は、最も明白に一人又は数人の英雄が、何如に偉大なる功業を成就し、社会又は国家のために新しき時代を開拓したかの実証を吾等に示して居る。遠く昔に溯るまでもなく、露西亞のレニン、伊太利のムッソリニ、土耳其のケマル・パシヤ、波斯のレザ・カンが能く一人の力を以て或は革命を行ひ、或は興国の大業を遂げ得ることを歴々と実証して居る。

かくて国運の発展は、竟に英雄の出現に待たねばならぬ。固より国家は政治・教育・宗教・其他百般の必要なる組織と機関とを具備しなければならぬけれど、その有効なる活用は一に偉大なる人格の力に待つ。国家に一人の英雄なく、唯だ平々凡々の民衆のみなりとすれば、吾等は決して国運の前途を樂觀し得ない。良將を得れば烏合の衆も侮るべからず、指揮官を失へば軍隊も恐るゝに足らぬ。これと同時に国民にも英雄崇拜の觀念なければならぬ。假令英雄ありとするも、国民が之を認識し、之に信頼し、之に随順する心なかりせば、古への猶太人が偉大なる予言者の言に耳を蔽へるために、遂に亡国の民となりし如く、国運の向上は望むべくもない。

それ故に、英雄をして不遇に終らしむる如き国家は、改造せらるべき国家である。英雄をして処を得ざらしむる如き時代は、棄て去らるべき時代である。然るに今夕吾等相集まりて高風を偲びつゝ、ある押川方義先生は、まさしく不遇の英雄であつた。先生は偉大なる宗教家であつた。而も予は多くの基督教徒が、先生を墮落せる宗教家と呼べるを聞いた。さり乍ら予自身としては、現代に於て親炙せる先輩のうち、未だ曾て先生の如き熱烈にして敬虔なる信神者あるを知らない。若し基督教界が先生を異端者とするならば、それは断じて先生の墮落せるに非ず、実に日本の基督教其者の墮落に外ならざるが故に、吾等は敢然として其の改革を叫ばねばならぬ。また先生は晩年に於て政治家として活動された。然るに吾等の大なる期待に反し、代議士としての先生は、殆ど為すところなくして了つた。而も予は之を以て先生に政治家としての資格なかりし故であると思はない。先生こそは世にも稀なる国士の典型であつたのだ。

それにも拘らず議会在先生をして活躍の余地なからしめたとすれば、それは疑ふべくもなく日本の議会在腐敗し墮落し果てたからだ。論より証拠、今や国民は神聖なるべき議会を罵りて『日比谷座の亡国劇』と呼び、ついに議会政治其者の価値にさへ深刻なる疑惑を抱くに至つたではないか。それ故に吾等は、日本の政治に対して徹底せる改革を要求する。

三

さて押川先生の名を天下に高からしめたのは、言ふ迄もなく仙台の東北学院であり、予は東北の生れである上に、郷党の先輩に熱烈なる先生の崇拜者ありしが故に、予は中学生時代に既に先生の名声を耳にして居た。而も機縁容易に熟せず、予が初めて先生の醫咳に接し得たのは、其後十数年を経て大学を卒業せんとする前後、即ち先生の晩年時代であつた。此時の先生は最早所謂宗教家に非ず、又は一時志されたりしと聞く事業家にも非ず、実に一個の国士として世に立たれて居た。而して極めて幸福なる事情によつて、予は宗教・教育・政治・外交の諸方面に互り、具さに先生の意見を拜聴するを得た。其等の意見は其の都度之を筆記して、十数回に互つて松村介石先生の雑誌『道』に発表した。予は先生長逝の後、之等の諸篇を更めて再読三読し、今更の如く先生の莊嚴なる魂を讚嘆せざるを得ない。

先生に接したる人々は、先づ其の雄渾なる気魄に打たれた。何となく偉大なるものが、磅礴として先生の衷に漲れるを感じた。先生の言行は総て大が、りで、何でも彼でも堂々として居た。煙草一本吸ふのでも、天地を吞吐する風情あり、茶漬一杯食ふのでも世界を平げる意気込があつた。先生の輪廓の大なりしは固より天稟であつたに相違ないが、あのやうな人格は鍛錬の結果でなければ出来るものでない。とかく天賦の大なる人物は、刻苦鍛錬を怠りがちなるが故に、概ね茫漠として捕捉し難い人間となる。面白味はあるけれど、至極の一物を欠くが故に何となく物足りな

い。然るに先生の人物が、あの偉大を以てして、茫漠に非ず堂々として居たのは、その大なる器に雄渾なる宗教的信仰を充たして居たからである。

先生は予が言ふ迄もなく、基督によつて其の靈性を喚び醒まされ、東北学院に拠つて基督教を説かれて居た頃は、正に日本基督教界第一人の靚があつた。而も予が教を受けたる当時の先生は、決して世の所謂基督者、即ち基督教と云ふ宗派の信者ではなかつた。吾が信ずるは宗教其者にして宗派に非ずとは、予が幾度びか先生に聴きたる言葉である。先生は斯く言はれた——『吾は基督教徒でもあり仏教徒でもある。同時に基督教徒でも仏教徒でもない。ナザレの耶蘇、又は印度の釈迦が吾に向つて、汝は吾が弟子なりやと問ふならば、吾は即座に然りと答へる。さり乍ら当代の牧師又は僧侶に向つては、吾は汝の徒に非ずと答へる外ない。吾が宗教は生命の自由、生命の独立、生命の充実發展を確保し、真理と善行と美とを慕ふ力を与ふるものである。耶蘇の魂を見よ。わが欲する所のもの、具備して其衷に在る。仏陀の魂また同然である。わが宗教は区々たる信条、繁瑣なる信条の中に在らず、たゞ無限と連なる生命の衷に在る。この生命われに流れ入りて、知性に発しては叡智となり、意志に発しては徳操と成り、情に発しては慈愛となる』と。まことに先生の魂には、古来の偉人の心に響きたる莊嚴なる天来の声が、昔ながらの力強さを以て儼然と響いて居た。而して先生は常に其声に従つて動かんと心懸けて居た。先生の言行が、世の常ならぬ高き調子を帯びて居たのは、まさしく之が為である。わけても此の天来の声が先生の衷に昂潮し来る時、吾等は吾に聖なるもの、神神しきものを先生に於て見た。

四

総ての眞実なる信神者が然る如く、先生は世にも熱烈なる愛国者であつた。先生が日本に就て語る時、吾等はたて

がみを振ふ獅子王の雄姿を先生に於て見た。先生は大日本帝国が、偉大なる使命を天より負はせられて居ることを、最も力強く信じて居た。その使命の莊嚴偉烈は、先生をして日本国民たるの榮譽に感激せしめた。而も国家現前の腐敗墮落、国運の前途に横はる幾多の難関は、先生の眼を安からざらしめた。先生は、斯く信じて居た——『吾等は先づ支那文明と接触して、悉く之を国民的生命に攝取したり。支那文明の精華たる儒教は、日本的儒教として其の本来の精神を發揮せられたり。孔孟の理想は其の本国に於て實現せられずして、却つて吾国に於て實現せられたり。次で吾等は、印度文明の精華たる仏教と接触せり。接触してより僅に二世紀にして、多くの高僧を国民の間より出だし、高遠なる印度哲学と国民的信仰とを渾一して日本的仏教の根柢を築き、更に進んでは仏陀の生活経綸に加ふるに日本国躰の本義を以て其の信仰の背景とせる日本的仏教を完成したり。最後に吾等は西洋文明及び其の生命なる基督教と接触し、現に之を接触しつゝあり。西洋文明及び基督教の国民化は、尚ほ未だ成就せられずと雖も、之を過去二千年の歴史に徴して、必ずや其時あるべきを信するものなり。かゝるが故に日本文明は東洋文明の綜合なり。而して其の西洋文明と基督教とを消化する暁に於ては、直ちに世界文明の綜合なり。吾等の確信する所を以てすれば、大日本帝国は洵にこれ世界文明の成就者なり。日本文明の完成は、直ちにこれ世界文明の完成なり。吾等は吾が国民的精神の裏に、世界を統一するの使命を荷へるものなり』。

日本民族の偉大は、まさしく精神的偉大である。先生は『天の此民に賦与し給ふところ極めて厚きこと』を確信し且躰認せるが故に、現在の悲しむべき国情を以て『偉大なる天賦を有しながら、人事の過誤によつて悲境に淪落しつあるもの』となし、国民を覚醒せしむることによつて、逆を順に転じ禍を福に転ずることの可能を信じて疑はなかつた。先生は下の如く教へた——『惟んみるに大和民族の精神根柢なる神道の生命は、日本国民を以て神の子孫なりとする莊嚴なる信仰に在り。猶太民族もまた人類を以て神の子なりとする信仰を有せり。而して此の信仰を醇化し完

美したるものを耶蘇基督となす。然りと雖も猶太人の信仰に在りては、神はもと宇宙の超在者なり。そは天地を造り、而して人間を造れるものなり。天地人の神に対するや、即ち造られたる者の造れる者に対する關係なり。大和民族にありては即ち然らず、神目ら天地となり万物となり人間となれるなり。日本国民の正統思想によれば、吾等は死すれば即ち神となるなり。是くの如きは甚だ僭越なるに似たりと雖も、宗教の真髓は竟に此外に求むべからず。神より出で、神に帰る総ての眞実の宗教は、要するに、唯だ此一事の上に立つ。抑も無限絶対は言詮の及ばざるところ、理智の達せざるところなり。苟くも吾等の知識に入り来るは、悉く有限相對の差別相ならざるなし。宗教とは他なし吾等の人格を以て驀地に無限絶対を躰得するに在り。故に宗教的生活に於ては、善悪なく美醜なく、乃至大小もなく高下もなし。故に宗教は是れ大安心なり、是れ無上安穩なり。宗教的生活は時空を離れ因果を超ゆ。故に宗教は是れ無量壽なり、神は道理に非ず、そは生命なり。生命とは感情なり、感情といふも悲喜好惡憎怨等の如きを意味するに非ず、直ちに一切を直観して之を躰得するの大能を謂ふなり。日本国民は建国以來、神を以て宇宙の根本生命となし、國民を以て其の神格の表現者とするの信仰を有せり。大日本帝国は實に此の信仰を根柢とし、皇室を中心と仰ぎ奉る一國躰を築けるものなり。天皇は吾等の君主たると同時に祖先にましまし、吾等は臣民たると同時に子孫たり。これ此の國の異國に異なり、此民異邦の民と似ざる所以にして、洵に世界無比の國躰たり。是れ皇天の寵賜なり、然り是れ皇天の特異なる発現なり。かくの如き國家なるが故に、仏教夾れば仏教を日本化し、儒教夾れば儒教を日本化し、基督教來れば基督教を日本化して、次第に國民的生命を豊富にし潑刺にし、且旺盛ならしむるを得るなり。この悠揚にして何者をも拒否せざる、而して一切を同化し去る信仰は、以て能く万邦を支配するに足れり。考へ來りて吾等の天職の如何に重且大なるかを知るべし。

先生は更に教へる——『吾等は洵に人となれる神なり。これ神道の教ゆる所にして、わが確信する所なり。然れど

も既に人となれる限りに於て、吾等は有限の世界に生存するものなり。此故に吾等は現実の生活に於て神を實現せざるべからず。これ吾等が無私の赤誠を以て修養と鍛錬とに努力し、万般大小の事に処して誤るなきを期せざる所以なり。想ふに政教別途の語ありてより、世人や、もすれば兩者を離して別箇物の如く観ず。然れども政教一致は皇国の大道にして、神政は即ち政治の極致なり。その是れを分離せるは、後世の人たゞ其形を襲ひて其弊を嗣げるによる。兩者の外形は固より別途なるべし、而も其の心機に至りては必ずや一徹なるを要す。近来政教両界の大萎縮は、おほむね此間の消息に通ぜざるより来る。今日の政治家に欠くる所多し、而して其の宗教的熱誠を欠くを以て最大恨事となす。彼等すでに宗教なくて何ぞ人生観あるを得ん。人生観なくて何ぞ世界観あるを得ん。如何に沉んや宇宙の精神を知ることおや。政治の要道は他なし国家をして神国たらしむるに在り。堂々たる人生観の上に立ち、社会と宇宙とに対する徹底せる觀念を有し、皇天の命ずる所に従つて國民を指導する。これ即ち眞実の政治家なり』。

五

是くの如き熱烈なる信仰と、明朗雄渾なる識見と、之に伴ふ無類の大胆、濃かなる慈愛、加ふるに堂々たる風采と莊重森嚴なる雄弁とを以てして、押川先生は竟に世に用ひられずして長逝した。先生を知るほどの人々は、皆な非常なる希望と期待とを先生にかけ、何等か偉大なる事業が必ず先生によつて成されねばならぬやうに考へて居た。それにも拘らず先生は東北学院創立以外、殆ど一事を成すことなくして世を逝つたのである。それ故に三宅雪嶺翁は、先生を以て出来損へる偉大なる傑作となし、造物主が世にも稀なる偉人を造るつもりで、何処かに手抜かりがあつたのだらうと言つて居る。

さり乍ら吾等は先生を以て偉人の出来損ひと思はない。人は其の事業よりも大である。此世に於ける仕事の大小

は、決して人格の価値を定める標準でない。従つて押川先生が大業を成さなかつたとしても、それは先生の偉人たることを毛頭妨げるものでない。吉田松陰は何事を成したか。学者としても知れたもの、武人としても知れたものであつた上に、志は一として蹉躓せざるなく、遂に刑辟に斃れたではないか。而も明治維新に対する松陰の功業は、所謂元勳諸公をして顔色なからしめる。予は思ふ、南洲甲東も実は単なる事業の人でない。而して其の真骨頭は却つて事業のために掩はれて居る。人間の真個の偉大は実に其魂に在る。偉大なる魂は、凡ての偉大なるもの、源である。プラトンが確言せる如く『凡ての善と悪とは魂に基き、そこより流れ出で、身軀その他全人に及ぶ』のである。価値の最高なるものは、内的価値即ち魂に属する価値である。予は押川先生に於て一個莊嚴なる魂を見た。この魂は其の接する総ての人々に至深の感激を与へた。愚鈍予の如きも、先生の魂によつて終生忘れ難き感化を受けた。感謝と思慕のこゝろ、綿々不断なる所以である。

さり乍ら相集まつて先生の偉大を語ることは、決して真に先生を追悼する所以でない。先生の魂に属する一切の価値を、吾等の努力と健闘とによつて日本国家に実現することが、先生に対する真個の手向である。先生の魂は複雑なるが故に、一人能く其の全軀を尽すことは難い。予は唯だ予の力の能くする限り、先生の魂の一部を分担する覚悟である。

——四月廿日、朝日講堂に於ける押川方義翁追悼講演会講演——